

第 23 回 これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨

1. 日時：2019 年 1 月 25 日（金）14：45～17：30

2. 場所：学術総合センター 19 階 1901-1902 会議室

3. 出席者：

（委員）

小山 憲司	中央大学 文学部 教授
相原 雪乃	北海道大学附属図書館 事務部長
佐藤 初美	東北大学附属図書館 情報管理課長
米澤 誠	京都大学附属図書館 事務部長
栗谷 禎子	公立はこだて未来大学情報ライブラリー
原 修	立教大学図書館 利用支援課 課長
飯野 勝則	佛教大学図書館 専門員
近藤 茂生	立命館大学図書館 学術情報部 次長
大向 一輝	国立情報学研究所 コンテンツ科学系 准教授
小野 亘	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長
吉田 幸苗	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長

（欠席）

呑海 沙織	筑波大学 図書館情報メディア系 教授
佐藤 義則	東北学院大学 文学部 教授

（陪席）

江川 和子	国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長
古橋 英枝	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係員(CiNii/KAKEN 担当)

（事務局）

片岡 真	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長(CiNii/KAKEN 担当)
上野 友稔	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長(CAT/ILL 担当)

<配布資料>

委員名簿

1. 第 22 回これからの学術情報システム構築検討委員会議事要旨
2. 第 20 回図書館総合展について

- 3-1. NACSIS-CAT 検討作業部会活動報告
- 3-2. CAT2020 にかかる作業の進捗について
- 4-1. 電子リソースデータ共有作業部会活動報告
- 4-2. 電子リソースデータ共有作業部会海外視察報告（まとめ）
- 5-1. 「これからの学術情報システムの在り方について」の改訂について
- 5-2. 「これからの学術情報システムの在り方について」の改訂について（議論の整理）
- 5-3. これからの学術情報システムの在り方について（改訂版）（案）
- 6-1. これからの学術情報システム構築検討委員会 2019 年度以降の体制について
- 6-2. これからの学術情報システム構築検討委員会 2019 年度以降の体制図（叩き台）
- 7-1. 2018 年度これからの学術情報システム構築検討委員会活動報告（案）
- 7-2-1. 2019 年度これからの学術情報システム構築検討委員会活動計画（案）
- 7-2-2. 2019 年度これからの学術情報システム構築検討委員会委員（案）

<参考資料>

- 1. CAT2020 クライアント作成のための技術資料（議事 3）
- 2-1. 今後目指すべき学術情報基盤の在り方補足（議事 5）
- 2-2. 2020 年目録所在情報サービス（NACSIS-CAT/ILL）再考のための提議（議事 5）
- 3. これからの学術情報システム構築検討委員会規程（議事 6）

4. 議事：

（1）前回（第 22 回）委員会の議事要旨確認

メール審議を経て 12/20 付で確定したため、委員会内での確認は割愛した。

（2）第 20 回図書館総合展について（報告）

事務局より、資料 2 について説明があった。

（3）NACSIS-CAT 検討作業部会の活動について（報告）

佐藤 NACSIS-CAT 検討作業部会主査より、資料 3-1 に基づいて報告があった。また、事務局より、資料 3-2 について説明があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- JAPAN/MARC が「日本目録規則 2018 年版」に対応するのはいつ頃か。
 - 現時点では不明であるが、2/28 に NDL で開催される書誌調整連絡会議の中で確認をしたいと考えている。
- CAT2020 への図書館システムの対応については、マイナーチェンジという理解でよいのか。また、図書館システムベンダーの CAT2020 への改修対応の時期はどのようなになっているか。

- 資料 3-2 のとおり、「CAT2020 対応クライアントのための技術資料」の確定にあたり、1/24 と 1/28 に図書館システムベンダーに対する最終のヒアリングを実施予定である。ヒアリング前に資料の事前共有をしているが、現時点では大きな改修になるという話は出てきていない。図書館システムベンダーの CAT2020 への対応については、各ベンダーから参加館に対応方法や時期について通知を行うよう、NII から働きかけを行いたい。
- 図書館書誌の NCID は変わるのか。
 - CAT2020 以降に作成された書誌を区別するための指標として、BOOK および PREBOOK のプレフィックスを変更する。
- 図書館システムが CAT2020 に対応しなかった場合、現場の目録作業において困ることはあるか。
 - PREBOOK と RELATION を参照することができないため、CAT2020 の新機能のメリットが生かせないが、これまでの CAT/ILL の業務は問題なく行うことができる。

(4) 電子リソースデータ共有作業部会の活動について（報告）

飯野電子リソースデータ共有作業部会主査より、資料 4-1 に基づいて報告があった。また事務局より、資料 4-2 について説明があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- 電子ブックのメタデータの体系的整備が難しいというのは、具体的にはどういうことか。
 - 資料 4-1 の p.10 にもあるように、検討対象とメタデータのレベル・フォーマットの整理から始めなければならなかった点が難しかった。今年度の検討結果としては、対象は大学や学協会などの OA を中心とし、書誌レベルはチャプターレベルが適切であろうと判断した。
- 作業部会の来年度以降の課題として、「図書館システム・ネットワークモデルの検討や運用体制について、中期的なタイムテーブルを策定」とあるが、タイムテーブルのゴールとして、具体的にはいつ頃を目指しているのか。
 - 現在の「在り方」改訂の議論において、NACSIS-CAT/ILL のシステム更新がある 2022 年を目指して、様々な機能を選択できる状況を作る、としている。これに間に合うように、電子リソースのライセンス情報や電子ブックのメタデータをどのように提供するか検討していきたいと考えている。
- 資料 4-2 の海外視察報告については、過去 3 年間の視察内容をまとめていただくことで、世界中の様々な取り組みから、現在本委員会で検討しているシステムの在り方が単なる想像ではなく現実のところにあるのだということを確認できた。

(5) 「これからの学術情報システムの在り方について」改訂について（審議）

事務局より、資料 5-1～5-3 について説明があった。また、議事 5・6 に関連する話題とし

て、米澤委員より、国立大学図書館協会の学術情報システム委員会が現在作成しているアクションプランについて紹介があった。

審議の結果、現在の資料に議論の内容を反映し、2/15 に予定されている推進会議で報告の後、公開することとなった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

[文書が想定する期間について]

- 今後も改訂することを想定して、年によるバージョン方式としてはどうか。
 - 末尾の括弧内を「改訂版」ではなく「2019」とする。

[検討体制の具体化について]

- ILL に関する課題についても、2019 年以降の新たな検討体制とタスクに盛り込みたい。印刷体と電子のメタデータ管理を課題とすると大規模図書館が担うことになりがちだが、ILL に課題を置くとどの規模の大学図書館にも考えてもらいやすくなるのではないか。
 - 「3. 進むべき方向性 (5)」を「アクセス及び資源共有」とするのはどうか。
 - 資源共有という言葉で ILL が想起されるか、という懸念がある。
 - ILL だけでなく、シェアードプリントなども含めて、全国の図書館間における資源共有について検討する、という意味では、資源共有という言葉が適切だと思う。「アクセス及び資源共有」としたい。

[「4.当面の課題」について]

- 「4.当面の課題」という言葉は消極的な印象であるので、「次に取り組むべき課題」もしくは「優先する課題」としてはどうか。
 - より積極的な表現として、「4.次に取り組むべき課題」とする。

[「3(2)持続可能な運用体制の構築」について]

- この箇所の文章が冗長に感じる。
 - 「新たな図書館システム・ネットワークの運用体制を構築するため、これまで継続してきたサービスを維持しつつ、より豊かな機能を利用する場合の持続可能な枠組及びコスト負担等について検討を行う。」とする。

[3(3)「システムの共同調達・運用への挑戦」について]

- 「...共同調達・運用への移行を選択肢とした」とあり、移行が選択肢となっているように読める。図 2 は「共同調達・運用」が選択肢であることを表現していると思うので、「への移行」を削除してはどうか。
 - 提案のとおり修正する。

[その他]

- この文書は、従来のサービスの枠組みに電子を取り込もうという視点で書かれているように読めるが、電子を扱うシステムに紙の資料をどう取り込むかというのが議論の方向性ではないか。
 - 今回の改訂は **2022 年**を目途とした検討を行うために進めてきた。指摘の内容はこれまでの議論からすればそのとおりではあるが、今後の委員会で引き続き議論することとし、今回は現在の案としたい。
- 大学図書館の危機感を感じられるが、利用者（研究者や学生など）の現状の問題が書かれていないのではないか。
 - この文書の目的が、各図書館の現場に対して現在の状況と目指すところを明示することなのであれば、今回の内容で必要十分なのではないかと感じている。
 - 研究者からは、必要な情報はすべて電子で入手可能で、価格高騰についての懸念はあるが、適正価格で入手さえできれば図書館経由である必要はない、といった意見を聞くこともある。利用者のためだったはずが、気が付けばむしろ図書館が蚊帳の外、といったことにならないように、システムの検討にあたっては利用者の視点が重要だと感じた。
 - 電子リソースの利用環境を整備して利用数が増えることは、従来図書館が取得してきた入館者数や貸出冊数といった統計値では、適切な活動評価ができなくなることを示している。今後は、対外的な見せ方についても検討が必要である。
 - 文書としては引き続き「統合的発見環境」の実現を目標としており、この文書の位置づけは **2022 年**を目指したひとつのステップだと考えている。次回の見直しの際に議論の対象としたい。

（６）2019 年度以降の体制について（審議）

事務局より、資料 6-1～6-2 について説明があった。審議の結果、現在の 2 つの作業部会を、システムモデル検討作業部会とシステムワークフロー検討作業部会に再編成することとなった。委員長と事務局で今回の議論を反映した改訂案を作成し、メール審議を実施することとなった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- JPCOAR との連携は、ERDB・JP 運用作業部会で検討するのか。
 - その想定である。ただし、スキーマ検討などは、システムワークフロー検討作業部会のタスクだと考えているため、将来的な広がりに関する部分はワークフロー部会で、運用に関するタスクは ERDB・JP 運用作業部会で対応する方向で考えている。
- 図中の「班」と書かれた部分はひとつの例であり、最終的なタスクの分担については各部会内で検討する、といった説明があった。具体的な検討課題を示した上で作業部会委員を募集することになると思うが、細かい班分けまでは想定せずに募集する、という認識でよいのか。
 - 一つの進め方として、全体の課題を提示し、初回以降に部会委員全体で相談しつ

つ、適材適所で班分けをするという方法も考えられる。

- CAT2020 運用支援作業部会は、CAT2020 の正式運用が始まれば役割を終える。ERDB-JP 運用作業部会のように今後さらに新たな提案をしていくものではないので、部会ではなく運用サポートチームといった体制でよいのではないかと理解している。
 - CAT 部会のタスクはご指摘の範囲でよいと思うが、名称は部会としておいたほうが、各機関が委員を出しやすいのではないかと。
- 資料 6-2 の左側にある 2 つの検討作業部会と右側の 2 つの運用（支援）作業部会の両方に同じメンバーが記載されている部分がある。一人の委員に兼任していただくことになる、負担が大きくなりすぎるのではないかと。
 - ERDB-JP の運用は、ワークフロー部会の「班」とするのはどうか。
 - ERDB-JP の運用には、メタデータの検討などの課題も含むため、システムワークフローの検討にも関わってもらったほうがよい。全体部会と班別の打合せとにどのように出席いただくかは適宜相談しながら進めたい。
 - ERDB-JP 部会をワークフロー部会の班とするのであれば、ワークフロー部会のタスクに現在の CAT 部会の後継タスクも入っているので、CAT 部会も入れてはどうか。

✧ 入れる方向で調整したい。
- ワークフロー部会のタスクが多くなりすぎると、主査の負担が大きくなることも懸念されるが、一つの部会に主査を複数置くことは可能なのか。
 - 規程上は特に問題ない。主査複数名または主査と副査とすることも考えられる。
- 部会の名称が長い。「図書館」と「ネットワーク」という用語は取ってはどうか。
 - 削除して「システムモデル検討作業部会」と「システムワークフロー検討作業部会」としたい。

（7）委員会の 2018 年度活動報告と 2019 年度活動計画について（審議）

事務局より、資料 7-1～7-2-2 について説明があった。審議の結果、資料 7-1 については確定とし、資料 7-2-1 については、委員長と事務局で今回の議論を反映させた内容に調整し、推進会議に諮ることとなった。

（8）その他

[電子リソースデータ共有作業部会の海外視察について]

- 資料 4-2 の海外視察報告の別表については、現状について広く通知をした方がよいと思うので、当初の予定では非公開だったが、内容を整理した上でできるだけ早く公開をしてはどうか。
 - 整理した上で公開準備を進める。

以上